The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第5号発刊にあたって
Author(s)	片山, 剛
Citation	近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター. 2014, 5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/60280
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第 5 号発刊にあたって

2011 年 11 月下旬、科研の追加内定の知らせが入った。その一ヶ月ほど前にはすでに次年度の科研応募が締め切られていたので、よもやこの時期にその年度の追加があるとは予想していなかった。急遽、メンバーとして予定していた方々に連絡をとったが、いずれも「この時期にそんなことがあるの？」と半信半疑。年度末まで約 4 ヶ月、しかも学年末で慌ただしい時期の 4 ヶ月、海外調査を主としている本科研では、準備して海外出張に出るには 3 月くらいしか動ける時期を見いだせない。まずは、2011 年度の予算をいかに有効に配分するか、これに時間を費やすことが、わたしにとっての本科研の始まりでした。

さて、本科研の課題名は「中国における土地領有の慣習的構造と土地制度近代化の試み」で、研究対象の時期・地域としては、〈民国期を中心とする南京〉が科研チーム全体の共通テーマです。「なぜ南京か？」というと、前科研で 1947 年ごろに南京郊外の中洲、江心洲を対象とする地籍図を発見したことによります。また、地籍図の発見以来、科研メンバーの多くは、地図類を活用することが多くなっています。

わたし自身はもともと広東専門。前科研でも広東でおこなった聞き取りで、「村の土地」に関するきわめて興味深い話を聞くことができましたので、この方面の調査研究も継続させていきます。昨年の調査では、「アヒルやガチョウは、どの田んぼでも〈落ち穂〉を自由に食べることができるのか」という疑問から、「村の土地」の問題を考えてみました。今年はどんな疑問から切り込もうか、飛行機に乗ってからも続けて考えてみることにします。

本科研のメンバーは、小林茂（大阪大学・大阪観光大学）、稲田清一（甲南大学）、荒武達朗（徳島大学）、田口宏二朗（大阪大学）、大坪慶之（三重大学）、片山の 6 名です。なお、本科研の特任研究員として、山本一が調査、ワークショップ開催、そして本ニューズレターの編集で活躍しています。

海外調査においては、台湾で中央研究院近代史研究所の巫仁恕氏に、南京で南京大学歴史系の范金民・夏維中・張学鋒・テムル・胡正寧の各氏および大学院生の諸君に、また上海から駆けつけてくれた復旦大学中国地理歴史研究所の朱海濱氏に、そして広東では広東省社会科学院歴史研究所の陳忠烈氏に、大変お世話になっています。この場をかりて謝意を表したく存じます。また、2012 年 2-3 月と同年 9 月の台湾調査には下岸廉くん（大阪大学文学部）、2013 年 12 月の台湾調査には八木啓俊くん（大阪大学文学部）に補助要員として参加してもらいました。

本年度は、すでに海外調査を 2 回、久しぶりのワークショップ、そしてこのニューズレターの刊行とつづき、今日からは 3 回目の海外調査で、科研のフルコースをこなす一年となりました。

広東調査出発の日　2014 年 3 月 9 日

研究代表者　片山　剛